

東北 被災地ボランティア① 活動記録

期間 2011/6/20(mon.)～6/24(fri.)
行き先 宮城県登米(とめ)市 登米本部 (1泊)
南三陸町歌津本部 (1泊)
作業 がれき撤去、写真等の洗浄

1. スケジュール

6/20 mon. 23:00 京都発東京行き 夜行バス <¥3,500>
6/21 tue. 9:00 東京発仙台行き 高速バス <¥3,000>
15:00 仙台発登米市役所行き 高速バス <往復¥2,300> 片道¥1,400
18:40 くりこま号に同乗
19:30 ミーティング@登米本部 ← 活動報告・翌日分割り振り
23:00 消灯
6/22 wed. 6:30 朝食
7:20 出発 歌津本部へ
9:00 がれき撤去作業 ← 写真洗浄班と分かれる
12:00 昼食
14:00 作業再開
17:00 作業終了、風呂(自衛隊駐屯所)へ
18:30 夕食
19:30 ミーティング
21:00 消灯
6/23 thu. 6:30 朝食、ミーティング
8:30 写真洗浄作業
12:00 昼食
16:00 作業終了、歌津出発
20:00 仙台発京都行き 夜行バス <¥5,500>
6/24 fri. 8:00 京都着

2. 申し込み～出発

東北へ行くことを考えたのは19日の夜。ネットで調べたところ、宿泊場所・軽い食事を保証するというRQ市民災害救援センターのサイトを発見。現地目線・リアルな現況を最優先にしており(自家用車で来訪?は困るという団体が多数な中、作業現場までの足として助かるとする点など)、ボランティアはいくらでも必要、とにかく来たらなんとかなる、というスタンスに惹かれ、20日夜出発・24日朝帰宅の計算で21日～23日の参加を申し込み。即座にボランティア要請メールが届き本格的に出発の準備を開始。

- ①大阪・京都～仙台の夜行バス：近鉄バスで往復2万円強、オリオンツアーで片道6000円前後
- ②仙台～登米本部への足：市役所までのバスを確認したが、そこからは不明のまま…
- ③おおまかな地図：グーグルマップを印刷したが、真っ白な地域。簡単な地図を買っても良かったか。
- ④足りない物：食料品(缶詰・レトルト食品)から作業グッズまで、ジャパンで買い集めた。
- ⑤服類：朝晩は予想以上に冷えるとの情報、雨予報から多い目に準備。

3. 出発～登米本部まで

不安な点が多い中出発したためか、バスに乗り遅れる（近鉄バスの往復を予約していたが、延期手続きの後キャンセルができたためほぼ返金してもらえた）。急遽、東京までの夜行を申し込み、翌朝の東京～仙台のバスも予約。21日の朝7時には仙台着の予定が、14時頃の到着。登米の読み方が<とめ>と<とよま>の2通りあるらしく（宮城県内の全く別の2つの地名だった）、いろいろと不安なまま登米市役所行きのバス（1時間に1本ある）に乗車。市役所への道中で東京本部や登米本部に行き方を尋ねつつ（市役所からバスで「飯土井（いいどい）」という所まで行くと登米本部から2キロの地点までは行けたらしいが荷物が多く断念）、市役所で2時間ほど待機してなんとか到着。

（（雑感））

仙台は驚くほど都会で、内陸部であるため震災の影響はほとんど見られなかった。登米市役所までは2時間弱の距離だが登米周辺になると塀やブロックが崩れている場所がところどころあった。が、想像していたような惨状はなかった。市役所の雰囲気も平常でボランティアっぽい人もおらず不安に。

4. 1日目：登米本部

登米本部は旧 鱒淵(ますぶち)小学校の体育館に設置。隣の校舎は被災者の方々の避難所になっている。体育館には100名以上の人が集まっていて生活を共にしている。ボランティアの私物、集まった救援物資、ボランティア用の貸出用具置き場などと区切られており、キッチン、事務室、トイレもある。

到着後、ここでの簡単なルール説明を聞き、夕食の残りをいただくと夜のミーティングが始まった。ミーティングの進行から食事作り、トイレ掃除など、あらゆる係を全員で回して自治しているようだが、思った以上に慣れていない人が少なかった。大半が2泊～長くても1週間程度で帰るといった様子。

ミーティングは各担当場所の1日の活動報告と明日の募集人数発表。活動報告をする人も慣れない人が多いようで、テンポが悪い。いろいろな人が生活の注意や忠告をしたりするので、結局誰がどういう立場の人なのかがよく分からないまま。

班分けは、上記のような内勤組と現場組に大きく分かれ、現場は歌津、河北、唐桑など数か所。活動内容と募集人数とで歌津を希望。現地での宿泊が可能で、そちらは水道・電気の通らない生活と聞き、残りの1泊を歌津での宿泊に決める。

一通り明日の予定が決まったところで段ボールと毛布を敷いて寝る場所を確保。通路や物品置き場を除いて雑魚寝自由であり、逆に早い者勝ちなので場所取りは結構深刻。食事の片づけをしていたらおじさんに話しかけられ、その辺りの人達でホテルを見に行くことに。まだ時期が早かったようで少ししか見られなかったが、空気がキレイで空は満面の星。よく知らない人達と何をしているんだろう…と冷静になる瞬間もありつつ、こんな機会だからこそ、素性を知らない者同士だからこそのおもしろさもあった。本部に戻ってから、明日の準備をした後誘われるままお酒の席へ。隣の避難所や既に寝ている人への気遣いから、小声こそそそと…という感じ。肩身の狭さを感じながらもここでしか知りあえない人達だと思い、楽しんだ。あまり会話はしなかったが、家が被災し家族を失って、ここに参加している人がいた。そんな人も少なくないのだとはとす。朝食準備組は5時起きだとのキッチンの主の声で解散、2時前に就寝。

（（雑感））

登米には半日しかおらず、全体像がいまいち掴めないままだった。全員が自主的に、自己責任でボランティアをするというのはこの場では非常に大切な原則になっていて、それに従った体育館の運営システムは良くできていると感じた。が、実際には大半の人は他人事な雰囲気と体育館の自治等には興味少ない。

食事と宿泊がタダでできるということで、いわばホームレスの滞在場所になっているような部分もあるらしい。

隣が避難所とのことで、関わりがあるかと想像していたが実際は完全に別であり、関わりはゼロ。上記の班分けで、隣の被災者の方々のサポートをするというグループもあったが。どのような形にするか難しい部分も多いと思うが、せつかく隣で生活しているのだから日常からもっと関わり合うような形にできたらいいのと思った。同じ環境下で同じモノを食べ、挨拶を交わすといったような関係、、被災者の方と同じ目線を持つことのできる理想的なボランティア団体に近づけるのではないだろうか。

5. 2日目：歌津本部、がれき処理

歌津は、南三陸町の一部。津波の被害を甚大に被った地域のひとつでもあるが、小さい地区であること、(あまりに全てが流されたために)何もなくなりマスコミで取り上げられる頻度が少ないことなどから、行政の支援の手が十分に届いておらず、現地の要請を受けて RQ 本部が設置された場所である。歌津本部は、1か月ほど前にボランティアによって手作りされた小屋とのこと。聞いていた通り水道・電気・ガスが通っておらず、雨水を貯めたタンクからの水道、太陽パネルを設置して電力貯蓄を行う。トイレの水は手や皿を洗った後の水。

到着後、現地リーダーが簡単に歌津・南三陸町の被害状況を説明してくれ、その後現場へ移動。がれき処理と、がれきから見つかった写真や依頼された写真の洗浄作業との2班に分かれる。

1日目はがれき処理。数日後にオープンするというファミリーマートと本部周辺までの歩道を歩きやすくするため、また重機では立ち入れない山の斜面や細々した土地を片づけるため、がれき回収や写真等思いつく品を見つけ出す作業を行う。釘やガラスも多く、また山手での作業のため、長そで長ズボンに鉄製インソールを入れた長靴と作業用グリップはマストで、それにヘルメット・ゴーグル・防塵マスクを装備。かなり暑く、1時間ごとに休憩を入れる。現場リーダー(清水さん)は毎日のように現場に出て作業している人で、本部の生活も支えているような山の主という感じ。きちんと監督してくれている様子で安心して作業できた。作業した場所は小さな山のような部分だったが、何重にも層になって住居の一部や紙類が出てきて、掘り返せばもっと出てくるかもしれないという印象。土に埋まっている紙切れが生活の一端を示しているようで、ひとつひとつ丁寧に扱うように心がける。実際に作業中、写真や手紙、ユニフォーム、トロフィーなどが見つかった。本人の元に帰れば、と願う。

昼に本部へ戻って昼食。韓国のカップラーメンを山のようにもらっているとのことでそれを食べたり。アイスボックスに入れている冷水は貴重。お湯を沸かすのも一苦労でゴミも出せないの飲みきる分だけのお湯を入れるのが掟。風が強くビニールシートで張っていた屋根が何度も飛び、清水さんがいろいろと手を加えてくれた。向かいの山の入口部分は日陰で風も通り、空気がキレイでとても快適だった。

午後の作業を開始。皆疲労がたまり、黙々と作業を進める。本部から持ってきた氷を休憩時間に皆で分け合って食べる。そんな中で一体感のようなものも生まれ自然とバケツリレーや共同作業も始まった。

作業終了後、本部へ戻り希望者は各自自衛隊が開放しているお風呂へ。被災者とボランティアは使用自由。そこまでの道程で歌津・志津川の海岸近くの被災地を回る。道路は車が通行できるよう片付いており、がれきはまとめられているが、ひしゃげた車や半壊した建物、崩れた山は圧巻。言葉が出ない。

風呂は、小さなサーカステントのようになっていて、中に更衣場と大きな湯船。女子は少し待たされた。待合用の座り場で被災地のおばあちゃんと同席。当時勤め先にいた父親を亡くした孫が毎日父の帰りを待っているという話をして泣かれていた。「ごめんねえ。いろんな人に毎日こーやって話して毎日泣いて暮らしてるんよ」と。今回の滞在で最初で最後だった被災者の生の声を聞かせていただいた。

京都を出た20日の夜から2日風呂に入っていなかった中、皿を洗う水やラーメンの湯に限りがある生

活の中、熱いお湯に満たされた湯船につかるのは幸せそのものだった。災害被災地に必要なもの、と考えて食料・服・毛布といったモノばかりが思い浮かんでいたが、現地に来て日本人にとっての風呂の有難さ・大切さを実感した。

歌津滞在組だけが残って夕食。雑穀米とカレー、近所で採れたきゅうり・みょうがの漬物、いただきもののサンマの塩焼き、と豪華な食卓。全ていただきものとのこと。食事中の会話で、はじめに挨拶をした歌津のリーダーが同い年である事が発覚し、驚く。その後のミーティング、それ以外のあらゆる姿を見ては、さらに驚き、尊敬。様々なプロジェクトを進めつつ、新たな支援の可能性も探り、周囲からの提案も快く受け入れる。周囲への目配りや謙虚さ、心遣い。まさに頭でっかちの京大生に見せたい同年代の人の姿だった。

昼間に貯めた太陽エネルギーからの電力で灯す明かりの中でのミーティング。流れは登米と同様ではあったが、人数が少ない分全員が自主的な雰囲気。少人数の中でたくさんのプロジェクトが進行している様子で、よく分からないながらももっとここで関わりたいと感じた。

ミーティング後テントで寝る準備。夜は冷えるからとブランケットを借りた。その後は自然とお酒の席に。定年後、時間が余ったと参加したおっちゃん、アウトドアなんて大嫌いだったのに…と話すパートのおばちゃん。定職は持たず旅を続けるアウトローな男の人やオーボエ奏者だと言う天才肌のおじさん、。全員、ここでしか出会えなかつただろう人ばかりですごい縁だと感じる。この日も満点の星の下で就寝。

6. 3日目：歌津本部、写真洗浄

2日目の歌津は早朝から豪雨。清水さんやリーダーが大急ぎで雨水を貯めるためにタンクや一輪車を外に出す。心から、「恵みの雨」だと感じた。今日は遠慮せず手が洗える、と嬉しくなった。今日はまた違う現場での作業が予定されていたが、中止。空からいただいた雨水を利用して、がれきから発掘された思いつきの出物品の洗浄作業と、昨日同様の写真の洗浄作業に分かれる。人数不足とのことで写真洗浄班へ。

写真洗浄は予想以上にビッグプロジェクトで、「思い出残し隊」として新聞等にも取り上げられていたらしい。WFP(World Food Program)の支援で建てられた、「WFP」と書かれた立派な白いビニールハウスの中での作業（WFPはRQに支援しているよう）。壁一面に韓国ラーメン。

海水と泥にのまれた写真は繁殖した細菌による浸食があり、放置しておくと劣化が進行する。洗浄の作業は結構複雑で、《劣化の程度でアルバム・写真を仕分け→アルバムから1枚ずつ写真を引き出すor切り取る→1次乾燥→表の土を刷毛で、裏の土を布で落とす→水で洗浄→すすぎ→2次乾燥→新しいアルバムにおさめる》という作業。劣化の進んだ写真や古い写真は、破れやすかったり触るだけで崩れてしまったり、水で色が溶け出してしまうこともあり、かなりデリケート。細菌により変色した部分を恐る恐る水でこすり洗いながら、できる限りキレイにして返したいという思いに駆り立てられる。ちょうど2日後の25日には、近くの避難所を借りて写真展示会をすること。それまでに一枚でも多く、持ち主に返せたらと願う。

昼食時には、滞在組はすっかり顔なじみで居心地の良さを感じた。夕方には帰らなければと思うと名残り惜しい。前日は昼寝して過ごした昼休みもあっという間に終わり、午後の作業を開始。

雨による湿度の高さもあり、乾燥用の棚がいっぱいになってしまう。前日から乾燥させているものを回収し、アルバムに写真を収める作業に移る。元のアルバムごとにまとめられたたくさんの写真を集め、新しいアルバムに納め直す順序を考える。じっくり見ているうちに家族の物語が見えてくる。一番インパクトの大きい写真、家族が一目でそれとわかる写真を表紙にして、展示会での持ち主との再会に備える。生まれて間もない赤ちゃんの笑顔、家族とペットが同じ格好になって寝そべっていたソファ、結婚式、旅行先での家族写真。

後からリーダーの話で知り、確かにそうだと気付いたことだが、この写真洗浄は、人の落とし物を勝手に拾い集めるという「遺失物……法」という法律に触れる作業。そういった意味でも非常にデリケートでやりづらい部分も多い作業だが、持ち主の元に戻った時、「みなさんがとても喜んでくださるのでその限りはやります」とのこと。

依頼された古いアルバムの洗浄作業で、もう何も見えない写真を「ボツ」としてゴミに回そうとしているのに気付いたリーダーが「それは絶対にしないでください」と丁寧ながら強く言っていたのが印象的だった。「僕たちを信頼して依頼してきてくださった方たちのモノだから、どんなものでも必ず全て返します」。当然と思えば当然だが、つい、勝手な判断を交えてしまいそうになる部分。ボランティアという立ち位置、あくまでも外部の者であるという自覚を持ち続けることの難しさにはとつする。

午後の作業が終了。着替えて、歌津を出発。車への荷詰め中何を言うでもなくそわそわと近くにいてくれた人や、最後の最後に「大阪まで？」と一言話しかけてくれた人。あつという間の1泊2日だったが、とてもたくさんの物をいただいた。

((雑感))

いかにもなボランティアの作業である(と思っていた)がれき撤去作業は、途中から単なる片づけ作業になってしまっていた事を感じた。思い出の物が見つかればと思うものの、なかなかない。自分にはもう少し直接的な支援がいいかなと感じた。

ただ、前日の班分けでは、直接被災者の方と関わるグループがあった中で、自分が一体どのように接すればいいのかという不安で、それを避けてしまった。単なるボランティア、何の資格もない自分がそこに立ち入ることが許されてしまう状況…に突っ込んで行けなかった。実際に「お元気チーム」と称される避難所や仮設住宅のお年寄りの訪問を仕事にしているグループに対しての、あまり好ましくない評判も耳にした。不安や自信のなさも感じず、ずけずけと入っていく人達もやはりいるのも当然で、そういった意味では不安やある種の恐れを感じながらもそこに入る勇気を持ってみななければいけないのかなと感じた。次回行く時には、挑戦してみようと思う。

写真の洗浄作業はやってみて、夢中になった。写真の中の物語は持ち主にしか分からないけれど、逆にだからこそ、わずかに残る背景も、木も、服も、消えないように、キレイに見えるように、と思った。25日の展示会は、広報の仕方が足りなかったようで、あまり多くの集客はなかったとのこと。期待した持ち主との再会もわずかで、少しがっかり。でも、これも現実。まだまだ集まった写真がたくさんあった。次につなげて少しでも多くの人元に帰ればと思う。

被災地の惨状を目の当たりにして。目の当たりにすることに正直どこかワクワクしていた自分があり、また2日目にはその景色を見慣れてしまっていた自分があった。なにもなくなっている土地を見て、そこに家が立ち並んでいたこと、家があればここから海なんて全く見えなかつただろうこと、今は何もないここから路地が続いていたこと、ごく普通の生活があったこと、想像力を働かせることで、感じること、見えることがたくさんあるはず。まだまだ不十分だと思う。ただの「見物」をしてしまっていると思った。

そして、この数日でのいろんな人との出会い。まさに一期一会で、日常から離れた人間関係の中でいろんな事を感じる。たくさんの価値観を持つ人の中で、“東北ボランティアをしに行こうと思い、行動した”という点で一致する人の集まり。

ボランティアとして、という立派な理由づけはできないけれども、被災地に実際に立ち、感じることは確実にある。1人でも多くの「日常」を大切にしている人に、日常がなくなったこの場所に来てほしいと感じた。